

ワンポイント・ブックレビュー

バーバラ・エーレンライク著 曾田和子訳『捨てられるホワイトカラー』

(東洋経済新報社、2007年)

著者バーバラ・エーレンライクはアメリカのコラムニストであり、社会評論家でもある。これまでもアメリカ下流社会の現実を始め社会的諸問題について論評してきている。本書は2002年頃からアメリカの中流階級を形成してきたホワイトカラーにもリストラの嵐が襲い、困難な再就職、たとえ首尾良く職に就いても低賃金とハードワークといった状況が社会問題化してきていることに注目し、著者自身がホワイトカラーの失業者に扮して職探しをするという体験をルポルタージュ形式でまとめたものである。

著者は、体験のスタート時点では、本著の前作である『ニッケル・アンド・タイムド』を書くために経験した時のような肉体労働に比べて「負担が少ないもの」と想定していたが、結果的にはとんでもないことを思い知らされることになるのである。まず、就職活動をするために3名ものコーチ(新しい履歴書の書き方、自己PRの仕方、性格テスト、服装・装飾などのアドバイスを受ける)をつけ、何百もの会社に履歴書に送った。さらに情報交換と有力なコネを探すためにネットワーキング、パーティへの参加も試みた。

こうした就職活動に合計6000ドルもの費用をかけたが、その努力も空しく7ヵ月後にやっと2つの企業(保険会社と化粧品会社)から採用の申し出を受けたにすぎなかった。しかも、それは委託販売の仕事で、売り上げに応じて手数料が入るだけで、給料も特典も職場もない、リスクを負うのは働く側のみにあるような仕組みの雇用形態であった。その上その仕事を遂行するために必要とされる研修を自己負担で受けなければならなかった。

著者が就職活動という体験を通じて発見した点の一つに、失業期間が長期化すればするほど、失業者自身が持っているスキルに見合わない仕事(つまり、低い地位に身を落として)につかざるをえないという意味での「不完全就業」へと移行する人たちが多いということだ。そして、「低賃金の生き残りの仕事の罨にはまったが最後、永久にそこから出られない」とも洞察している。毛沢東の「下放」思想を引き合いにしながら「収入と地位によってのみ価値が測られる社会ならなおのこと、社会の階層を下降するということは、挫折感と疎外感と、恥辱をもたらすものなのだ」とも。つまり、「下降化」は中流であった人々に生活水準の低下をもたらすだけでなく、精神的なダメージも与えてしまっている。

本書は、今日のアメリカのホワイトカラーが再就職にあたって自分のスキルに見合った職に就くことが「ラクダが針の穴を通る」よりも難しい現実であることを生々しく突きつけてくれた。そして多くのホワイトカラーの失業者がさらにランクの低い職に就くしかなく、中流から下流へと流されていくということもリアルに伝わってくる。日本のホワイトカラーも近い将来このような深刻な事態を迎えるのであろうかと危惧されるなど極めて衝撃的な書である。いや、もう既に日本でも始まっているのかも知れない。労働力不足と言われながら正規雇用で再就職することは難しくなっており、かつて日経連が提唱した雇用のポートフォリオ(雇用柔軟型グループ、非正規雇用者比率の増大)通りに進行しつつあると思われる。

本書にあえて注文をつけるとすれば、こうした状況を生み出してきた背景や原因についても考察し、ホワイトカラーにおける失業の構造的な分析を加えて欲しかった。統計によれば、2004年時点におけるアメリカの失業率は5.6%で、OECD加盟30カ国平均(6.9%)に比べてやや低い。ただし、1年以上の長期失業者の割合はOECD平均の2倍になっており、再就職が困難になってきていることを伺わせている。もはや企業のコスト削減は景気の循環とは関係なく進んでいるのである。このような事態を引き起こしている一因として、最近言われているホワイトカラー業務におけるグローバル化、「オフショアリング」の増加(企業が自社の業務プロセスの一部または全部を海外に移管・委託すること)などと無関係ではないであろう(MK)。